

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

生活スタイルを選択すること：
暖房装置の近代化をめぐって (私のスケッチ・ブック
(28))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005911

生活スタイルを選択すること ——暖房装置の近代化をめぐる——

国立民族学博物館 教授
森 明子

■セントラルヒーティングの普及

冬の寒さが厳しいヨーロッパでは、暖房が必須である。ヨーロッパで家庭暖房の主流をなすのはセントラルヒーティングで、その設置は国のおこなう統計項目にも挙げられるほど、近代化の指標のひとつになった。

ほとんどの家庭にセントラルヒーティングのパイプが通っているから、あたりまえに考えがちであるが、このような設

備が建物の建築当初からそなえてあったわけではない。

西側諸国でセントラルヒーティングが各家庭に普及していったのは、およそ1970年代からである。人びとが住む建物には、100年を越す古い建物もめずらしくないのであるから、さまざまな近代的な設備は、あとから付け加えられていったことは明らかだ。電気やガス、エレベータ、電話線のほか、バス・トイレの設備もそうである。セントラルヒーティン



都市の町並みを構成する集合住宅

グも、そのような設備のひとつである。

■新旧の暖房装置

私の友人は、旧西ベルリンの古い労働者地区に住んでいる。友人の住む集合住宅も古いもので、ここでは数年前に家主がセントラルヒーティングの設備を敷設した。いまごろになって、家主がこのような設備を整えた背景には、ベルリンの壁が撤去されたのちの、建築ブームがある。それまで、この住人の暖房設備は、カッヘルオーフェンと呼ばれる大きなストーブであった。

カッヘルオーフェンの大きさはいろいろあるが、平均的なもので、幅1.5メートル、高さ1.8メートル、奥行き0.8メートル程度である。背面を壁から数十センチメートルほどはなして設置する。残り

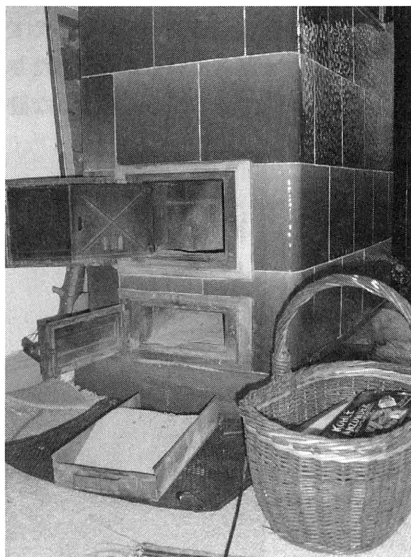
の三面と天頂部はタイル張りである。

この大きなストーブのなかで、石炭を燃やす。着火してから石炭に火がまわるまで注意する必要があるが、その後ストーブの口を閉めたあとは、タイルがゆっくりと温まってゆくにつれて、部屋の温度があがっていく。石炭が燃えきったあとでも、タイルは温度を保持している。10時間あまりたったころから、次第に温度が下がる。朝、ストーブを焚いて外出し、午後には帰宅するころには、部屋は心地よく暖まっていて、就寝したのち夜半から次第に温度が下がっていく、という具合だ。

朝、ストーブをたく時間が遅すぎれば、部屋が暖まるのが遅れ、震えてベッドにはいつから熱くなる、ということにもなる。人びとは、寒さと時間を按配して



カッヘルオーフェン：前面に、鍋などを保温するための窓がついていて、そこにタオルなどをかけている



ストーブの焚き口。手前に、引き出しのようにして出しているのが灰。右側の籠に焚き付け用の木切れや着火剤を入れてある

ストーブを使う。寒さによって中に入れる石炭の数も調節し、厳寒期には、夜にもストーブを焚くことによって、早朝から朝の暖房を確保する。

カッヘルオーフェンは、たいへん快適な暖かさを提供してくれる。日本の暖房は直火で、他方はオープンといえればそれまでだが、その味わいの違いは、電子レンジと釜で炊いた米の味の違いといったほうが、しっくりする。

カッヘルオーフェンの暖かさは、セントラルヒーティングの暖かさとも異なる。これはドイツ人もいうことで、前者が直火を包み込んだタイルが、ゆっくりと空気を暖めていくのに対して、パイプに湯を通すセントラルヒーティングの熱板は、はるかに短時間に熱を帯びる。

だが「暖かさの違い」というときは、もう少し違うニュアンスがある。うまく説明できないのだが、セントラルヒーティングが、複数の部屋を同時に一律に温めるシステムであることも、その暖かさを平板で退屈なものにしているように思われる。

空気が退屈、というのも妙な話であるが、部屋ごとに時間をかけて空気を暖めていくカッヘルオーフェンの醸し出す暖かさには、メロディーのようなものを感じるのである。

セントラルヒーティングは近代的な生活スタイルとともに普及した。カッヘルオーフェンが、セントラルヒーティングに席をゆずった最大の理由は、その手間にあるだろう。

カッヘルオーフェンを焚く場合には、石炭に火がまわるまで、ストーブの口を

みながら1時間くらいのあいだ気をつけておく必要がある。加えて石炭は、周囲のものをみな黒くするから扱いがやかかいである。

石炭の収納場所を確保する必要があるし、何より灰の始末もめんどうである。毎朝、前日の灰をバケツに移し、数日で一杯になったバケツの灰をゴミとして出すのであるが、十分用心しても、舞い上がった灰を多少かぶることは覚悟しなければならない。

集合住宅全体から出される灰の量は、かなりのものになるから、ゴミ収集能力とも関連してくる。こうした手間を、スイッチをひねればやがて暖くなるセントラルヒーティングが、解消した。

■家主の思惑と、借家人の選択

さて、友人の集合住宅の家主が、セントラルヒーティングの設備を整えてどうなったかというと、何も変わらなかった。数年たったいまも、住人たちはカッヘルオーフェンを使い続けている。

その主要な理由は経費にある。建物にパイプを通す工事は家主が行ったが、器具の購入は住人負担である。3つの部屋を暖房しようとするなら、3部屋分の器具を買って設置しなければならない。そのうえ燃料費も、石炭のほうが安い。

それでも住人は、便利で近代的な暖房システムに移行するだろうというのが家主の思惑であったが、そうはならなかった。

ただし例外があった。設備導入後に入居した一家である。皮肉なのはこの一家の住まいが、建物の最上階にあることだ。

セントラルヒーティングは、温湯がパイプを通ることによって暖房する。その温湯を沸かすのは建物の地階にあるボイラーで、それを上階の各戸に通す。全戸がこれを使ってこそ効率もあがるが、そうでない場合には、コストの割に効果は小さい。

今の場合、最上階に住む住人がセントラルヒーティングのスイッチをひねると、地階から温湯が最上階まで通じていくまで時間もかかるし、熱も放射する。途上にある友人の部屋では、パイプの周囲だけほんのりと暖かくなる。友人にとってはちょっとしたプレゼントであるが、最上階の住人はその光熱費も払っているのだから、おもしろいわけではない。

おもしろいのは、最上階の住人のことを、隣人たちは気の毒には思っても、不公平であるとは思わないことだ。いやなら自身もカッヘルオーフェンを使えばいい。それを使わないのは本人の決断である。

家主にしてみれば、最上階の住人の苦情を聞かなければならないうえに、いまだに煙突掃除もしなければならないことも不満である。住人がカッヘルオーフェンを使用する限り、煙突をきちんと管理することは、消防上の理由から家主に課せられた義務であるからだ。

■見えてくる隣人関係

まだ暖房をいれない季節に、この集合住宅でぼや騒ぎがあった。上階に住む住人の床から、突然煙があがってきたというのである。自宅で小さな子供を遊ばせていた住人はひじょうに驚いて、何台も

の消防車が建物をとりまいた。

煙の原因は、煙突管理の不備にあった。階下に住む住人が、反故になった紙をストーブで燃やした煙が、煙突の不備のために漏れて、上階の住宅の床からあがったのである。家主はその管理について、当局から注意を受けた。隣人たちは、寒い季節を迎える前に、このような煙突の不備が発見されたことを、むしろ幸運なことだったととらえた。

家主がセントラルヒーティングを導入したのには、集合住宅の資産価値を高めるといふ狙いがあった。東西ドイツ再統一後のベルリンでは、このような不動産投資があちこちで行われたが、その多くは目論見どおりの成果をあげていない。

それを阻んでいるひとつの要因は、借家人の権利が法律によって厳密に保護されていて、借家人はその権利をよく知って行動するからである。地主や家主が投機的な事業にのりだしたくても、容易にそれができない。このことが、集合住宅の住人たちのあいだの人間関係を維持し、ひいては都市社会を維持することに貢献していると、わたしには思われる。



石炭。これをひとつのカッヘルオーフェンに8～12個入れる

たとえば友人宅で、ひと冬のあいだに消費する石炭は約3トンである。収納スペースに収まるのは半トンであるため、それを何回かに分けて注文するのだが、友人はそれを隣人と組んで、毎回1トンずつ購入している。

石炭の運搬と収納は店の人に頼むが、配達日には、収納場所をあけて汚れよけの敷物を用意するなど、それなりの準備が必要になる。こうした作業を隣人と組んで行うには、良好な隣人関係が前提になる。

1トン単位で買うのは、それが経済的だからで、友人は長年この隣人と組んでやってきた。ただし今年は3人で購入することにしたという。同じ集合住宅に住む老人が亡くなり、未亡人がひとり残されたので、その未亡人の身の回りにも配慮した結果である。

隣人の目から隠れたところでスイッチをひねれば用が足りるセントラルヒーティングと違って、石炭の購入から煙突掃除、灰の始末にいたるまで、隣人の目のなかにはいつてくるカッヘルオーフェンは、それだけ隣人関係を目にみえるものにする。だがそれは、現代社会を生きる人びとにとって、より重要なものになっているといえるだろう。

■生活スタイルの選択

この集合住宅の人びとが、セントラルヒーティングへの移行を拒んで、カッヘ

ルオーフェンを使いつづけているのは、一時的な出費を厭うためだけではないと私は思う。

朝、家族の一日の行動予定、夜の帰宅時間などを考えながら部屋を暖め、石炭に火がまわるのをゆっくりと待つ。このような行為は、近代化やスピード化と異なる方向を向いた生活のリズムをつくり出す。そうした生活スタイルを選択している人々の意識を見て取ることができるのである。

旧東ドイツ地域では、2000年代にはいつてから、セントラルヒーティングが普及しつつある。その一方で、石油やガスなどの燃料費の値上げによって、いったんセントラルヒーティングに移行したものの、カッヘルオーフェンにもどる、という人々も増えているという。ことによると、この集合住宅の人たちの選択は、今後、多くの人々が支持するものになるかもしれない。

東西ドイツ統一後、グローバル化の進展とともに、失業問題は深刻化して、社会の状況は悪くなったとよくいわれる。たしかにそういう側面はあるが、そのような状況のなかで、新しいものに短絡的に移行することを拒否する選択もおこなわれている。しかもそれによって、隣人関係、社会関係が維持されているという現実もある。このような人々の意思もあるということを見逃してはならないと思う。